

発見された『ジャパン・エキスプレス』号外(右)と
発行者ショイイヤー(『ジャパン・パンチ』より)

開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日/昭和63年2月3日
印刷/㈲三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第620366号 類別・分類B-BE160

新資料紹介

「横浜最初の新聞」 『ジャパン・エキスプレス』と 『ショイイヤーのサーキュラー』

複数の外国人居留民の回顧談によると、ショイイヤーが「横浜で最初の新聞」を発行した。日本人の彫師が木版に彫刻し、和紙に印刷して配布されたという。ショイイヤーは万延元年(一八六〇)正月に来日したアメリカ人競売業者である。

かつて小野秀雄氏は、『ジャパン・エキスプレス』という木版刷り英字新聞が、フランス外務省文書に添付されているのを発見し、これがショイイヤーの新聞であろうと推定されたが、その実態は不明であった。横浜開港資料館では、最近その実物を入手できたので、紹介してみよう。

入手したのは、「六月一五日(月曜日)」の日付を持つ号外である。木版一枚刷りで、前半には日本人の情報提供者がもたらした「ミカドの暗殺」等のニュース、後半に競売廣告がある。競売の日付が「明日六月一七日(火曜日)」となつてるので、発行日は「一六日」のはずである。彫師が6を5と間違えたのである。年の記載はないが、一八六二年六月二日付『ジャ

パン・ヘラルド』に、「ミカド暗殺のニュースには根拠がない」という記事があるので、一八六二年と推定される。寺田屋事件などが誤って伝えられたのであろう。

フランス外務省文書に添付されている『エクスプレス』は、一八六二年七月一二日号、八月一日号、九月二〇日号である。前の二号は断簡だが、生麦事件を報ずる最後の号は、両面刷りの表裏とも完全なかたちで添付されており、「一巻一八号(Vol. I No. 18)」の記入がある。発行日はすべて土曜なので、

土曜刊行の週刊紙と考えられる。これらは号外ではなく、通常のナンバーであろう。逆算すると、創刊号の日付は一八六二年五月二十四日になる。この結論は、ショイイヤーが『ヘラルド』に先立つ「最初の新聞」を発行したという居留民の証言と矛盾する。このことをどう

『エクスプレス』とは、それに名称と通しナンバーが与えられ、体裁を新聞に近づけたもの、サーキュラーと新聞の中間的な形態と考えられる。

『エクスプレス』は、日本人から民間のニュースの収集に務めたことによって、居留地における情報伝達の媒体として一定の役割を果たしたと思われる。そのような情報源からして、誤報も多かつたであろうが、新聞草創期の様相を探るうえでユニークな存在といえよう。

ショイイヤーが『エクスプレス』よりも前に発行していた印刷物がある。彼は、『ヘラルド』一八六二年四月二六日号の広告で、競売品

の目録はサーキュラーに記載されると述べている。サーキュラーとは、外国商館が顧客を対象として、商況に時事ニュースを添えて発行する商館通信のことである。ショイイヤーのそれにも時事ニュースが添えられていたに違いない。ショイイヤーの来日時期からみて、その発行は『ヘラルド』より早かつたろう。競売業という職業柄、海外の顧客ではなく、居留民を対象として配布されたことから、それが「最初の新聞」と記憶されたのではないか。活字印刷による本格的な新聞が、一八六一年一月二三日、『ヘラルド』創刊号として出現する前に、その代替物として居留民に珍重されたのであろう。

横浜開港資料館が入手した『エクスプレス』の号外は、二月三日から始まる「横浜もののはじめ」展で初公開される。

(斎藤多喜夫)

『横浜もののはじめ』展 に寄せて

阿部征寛（企画調査室長） 横

浜開港資料館では、昭和五六六年六月の開館記念『ベリーー提督』展以来、自主企画による年四回の特別・

企画展示を実施してきているわけですが、この一月三日から、『市制施行と横浜の人びと』展にひきつづき、昭和六一年度最後の展示としまして『横浜もののはじめ』展を開催します。資料館のこれまでの展示でも、もののはじめてな展示をいくつか手がけてきましたが、「ここで「もののはじめ」を集め成してみよう」という気になった動機について、展示の企画にあたっている斎藤さんからお聞かせください。

斎藤多喜夫（館員） 集大成と

いうわけにはいきませんが、「もののはじめ」は最も人気のあるテーマでして、マスコミ関係からの問い合わせも多く、その都度わたしたち館員が走りまわってきたといふ面があります。その際によく『横浜市史稿風俗編』（昭和七年）を利用するのですが、現在からみて明らかなる誤りや疑わしいところが多く、それにもかわらず、後

ろめたさを感じながらも『風俗編』で手つとりばらく対応してしまったのが現状だと思います。これまで、下岡蓮杖と横浜写真展（昭和五六八年八月～一〇月）、『ビールと文明開化の横浜』展（昭和五九年八月～一〇月）、『ジョセフ彦と横浜の新聞』展（昭和六〇年二月～四月）などを通して、機会あるごとに史実を正してきたわけですが、ここからでキチンとした「もののはじめ」をまとめておきたい、そういう機会が必要なのではないかということが動機です。

阿部 実際に手がけての感想はいかがですか。

斎藤 先きの『横浜にあつた西

洋～幕末の外国人居留地』展（昭和六一年五月～七月）にあわせて「ヤング・ジャパン年表稿」（『たまくす』第五号）を作成した際に、「もののはじめ」的な面にもかなり注意していましたつもりだったので、準備を始めた頃は楽にできるだろうとかをくくっていましたが、実際につつこんでみると際限がないという感じですね。

「もののはじめ」といつても、ふたおりの系譜があると思うんですね。ひとつは、鉄道とか電信とか、ガスも含めていいと思いまが、官営あるいは公共的な事業の系譜で、公文書によって誤りなく史実を明らかにすることができます。もうひとつの民間の「もののはじめ」については、回顧談に基づく例が多く、開港五十周年記念の「横浜開港側面史」（明治四二年に集大成されています。回顧談だけに面白さはあります。が、史実についての裏付けをとるとなると非常に苦労します。

阿部 民間の「もののはじめ」に関係して、史料の残存状況はどういつた感じですか。

斎藤 原文書はほとんどありませんが、新聞、とくに開業広告から史実を発見確認する作業が今回は大きな比重を占めています。この資料館でも、横浜で発行された英字新聞の収集に力を入れていて、わざで、しかも複製本で手軽にみることができますので今回も大きいに活用しました。また邦字新聞も近年複刻がいくつか刊行されたこともあって相当新しい事実がでてきたと思っています。

阿部 その新しい事実を二、三紹介してください。

斎藤 僕にとって一番スリリングな新事実は写真に関してです。『写真家ベアトと幕末の日本』展（昭和六二年一月～五月）で調べ尽くしたつもりで『横浜写真小史』（『F・

ペアト幕末日本写真集』所収）を書いたわけですが、今度ロジャー・スミスさんとふう人の回顧談（Rogers, "Early Recollections of Yokohama 1859～1864," The Japan Weekly Mail, 1903. 12. 5）が見つかりました。その中に「フリーマンは商品として写真機を輸入した最初の人であり、数か月間自ら肖像写真の撮影にあつたが、その後作品と事業のすべてをある日本人に譲渡した」という記述がでてきました。一八六一年頃のことでのある日本人とは、その墓碑銘に、横浜開港当初「米人富麗滿」から写真術を伝授されたとある鶴飼玉川（玉川三次）のことに違いなく、日本人最初の職業写真家は下岡蓮杖でも上野彦丞ね。新聞、とくに開業広告から史実を発見確認する作業が今回は大きな比重を占めています。この資料館でも、横浜で発行された英字新聞の収集に力を入れていて、わざで、しかも複製本で手軽にみることができますので今回も大きいに活用しました。また邦字新聞も近年複刻がいくつか刊行されたこともあって相当新しい事実がでてきたと思っています。

阿部 その新しい事実を二、三紹介してください。

斎藤 僕にとって一番スリリングな新事実は写真に関してです。『写真家ベアトと幕末の日本』展（昭和六二年一月～五月）で調べ尽くしたつもりで『横浜写真小史』（『F・

それから、居留地にかかるスポートについて本格的に調べられることにならなかったという感じがします。有名な競馬ですが、「ジャパン・ヘラルド」の記事によつて

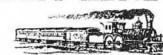
一八六一年五月一日二日が第一回目であることが最近明らかになります。有名な競馬ですら、「ジャパン・ヘラルド」の記事によつてたくらいで、今回の展示ではほとんど新事実を提示できるものと思つています。

阿部 いま居留地での「もののはじめ」ということで、写真・新聞・スポーツの三つの新事実を紹介してもらつたわけですが、外国との関係で国別に何か特徴的なことが見出せましょうか。

斎藤 大雑把な印象ですが、英米の取組みには顕著な違いがあります。さきほど官と民のふたつの「もののはじめ」の系譜ということをいいましたが、イギリスは官の系譜で際立っています。しかも、パークスなんかが代表でしようが、外交官、お雇い技術、商人の三者が提携して組織的に対応するという面が強いています。電信にしろ鉄道にしろいわば一種の請負業といった感じさえします。それに対してアメリカ人は個人としていろいろなことを手がけています。ヘボンは辞書・目薬・義足などの「もののはじめ」で名を遺していますが、宣教師ヘボンとしてはある意味で不本意だったでしょうね。今回白かったのは薬剤師のプラウターという人で、石鹼もつくつていま

すが、戸部三二一番地でマッチ工場を始めています。その創業は明治六年で、今日まであります。

THE JAPAN SAFETY MATCH COMPANY.



The Best and Cheapest Match made in Japan.

Special Quotations for Large Quantities.

Consumers are requested to patronize a Native-made Article which has been proved quite equal to, while it is twenty-five per cent. cheaper than any imported.

FACTORY: NO. 321, TOBE.

Address, T. L. BROWER,
Manager, Yokohama.

プラウターの汽車印マッチ広告

斎藤 中國劇場「会芳樓」の引

いえば、英仏駐屯軍の果たした役割も結構大きかったと思います。たとえば駐屯軍の胃袋を満たすための商売や産業が興つてくるとか、そこに日本人も入ってきますしね。

受容に関して気がついたことは、居留地内の現象であつても彼らは日本人を非常に意識してやつてゐるよう思います。たとえば、「よこはまかけのり」はるのもようし」というチラシがあるんですが、これは居留外国人による日本で最初の競馬のプログラムを世話役たちが日本語訳して木版刷りにしたもので、こういうものがだされると自体日本人の参加を呼びかけているわけです。

阿部 参加といつても、見るのも参加、馬主になる、騎手になる、と様々なレベルでの「もののはじめ」が考えられますね。

斎藤 野球の項でふれますが、居留地での始め、日本人による始まり、最初の国際交流試合と三つの起源を明らかにする必要がある場合も当然あります。通説どおり、東京の開成学校で、アメリカ人教師ウイルソンが生徒に教えたのが「日本人による始め」ですが、今回その二年前の明治四年一〇月三〇日に、横浜公園のクリケットグラウンドで、居留外国人と太平洋郵船のコロラド号の水夫チームが野球の試合を行つたという新事実を発見しました。これが日本最初の野球の試合です。現在横浜スタジ

アムのある場所ですから、この新事実は話題になるだろうと思います。また、從来最初の国際野球試合は、明治二九年の一高対横浜の居留外国人チームとされていますが、これよりずっと早く、明治八年には居留外国人と開成学校の生徒が試合をしたと記す文献もあります。まだこれを裏付ける史料を見つけていませんが、もっと調べなければ、まだまだ新事実はたくさん出てくるものと思います。

阿部 今回の「もののはじめ」は、居留地を窓口として展開した事象を中心にするということですが、定着する時期はいつ頃になりますかね。

斎藤 一般的には明治一〇年代から二〇年代ということになるでしょう。またスポーツになりますが、ライフル射撃は一八六五年に居留外国人によるスイス・ライフル・クラブとヨコハマ・ライフル・アソシエーションが組織されて横浜での「もののはじめ」となりますが、横浜放鳥射撃会というのがあって、今度の展示でその規則書を紹介します。会長が有島武蔵、副会長が吉田健三で、面白いのは、発起人に外国人で唯一人ワーグマンがいます。明治二二(一八八八)年のものです。これなども定着のひとつあらわれだと思いますし、ボートレースも一八六三年から駐屯軍の軍人たちが始めますが、明治三六年の資料に「第四回横浜聯

治八年ですが、同年正月には、持丸幸助という人がアメリカから機械を取り寄せ、平沼にマッチ工場を設立したことが「横浜毎日新聞」の記事からわかりました。これは從来日本最初とされていた東京の新辯社より早いんですね。ラウアーラーが工場を創設した戸部三二一番地というのは平沼に近く、居留地外ですから工場の名義人は日本人だったはずで、それが持丸幸助だったと考えたいところですが、今回はそこまで立証できませんでした。

阿部 その他の国は。

斎藤 依頼する資料によつてどうしても英米中心になつてしまつた感じさえします。それに対してオランダ病院くらいですね。

阿部 中国人の関係で紹介する資料を予定していますか。

斎藤 中国劇場「会芳樓」の引

分類になりますが、ひとつはイギリスに代表されるような公共事業的な面での「もののはじめ」と、社会的な分野での「もののはじめ」ということになります。確かに日本人がとけこんでいくという理解でよいか。

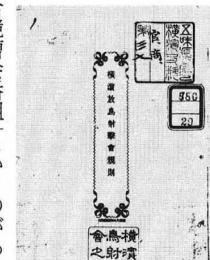
阿部 「もののはじめ」現象の分類になりますが、ひとつはイギリスに代表されるような公共事業的な面での「もののはじめ」と、社会的な分野での「もののはじめ」ということになりますか。そのなかに日本人がとけこんでいく

のですが、オランダは意外と少なく、今回とりあげるのは、山手のオランダ病院くらいですね。

斎藤 分類的には文化面での「もののはじめ」がありますね。生活面での「もののはじめ」に関して

アムのある場所ですから、この新事実は話題になるだろうと思います。また、從来最初の国際野球試合は、明治二九年の一高対横浜の居留外国人チームとされていますが、これよりずっと早く、明治八年には居留外国人と開成学校の生徒が試合をしたと記す文献もあります。まだこれを裏付ける史料を見つけていませんが、もっと調べなければ、まだまだ新事実はたくさん出てくるものと思います。

中国劇場「会芳樓」番付



『横浜放鳥射撃会規則』
表紙

合競漕会番組」というのがあって、正金銀行チーム、第二銀行チーム、日本郵船チームなどがバンドの前で盛んにやっています。

阿部 「もののはじめ」の定着について、明治二〇年代の話がでましたので前回の展示『市制施行と横浜の人びと』展を担当して、『市制施行と横浜の人びと』というところで、明治二〇年代の話を井川さんから意見なり感想なりがあればどうぞ。

井川克彦（館員） 前回の展示とは離ますが、今、明治九年頃の引取記事を集計する作業をしています。どういう商人がどういう品を輸入しているのかということが日々判明するのですが、当り前かもしれません、輸入では最初に完成品がたくさん入って来るんですね。それがだんだん原料的なものがふえてきて、原料を加工する新しい工業が興つてくるということが輸入品の集計を通して実感できるわけです。そういったことかという気がします。

井川克彦（館員） 「もののはじめ」と、明治中期以後のイメージとの違いに関係しているのではない

かという気がします。

阿部 根づくもの、根づかないものの基準といったことは考えられましようか。

阿部 落社会がこれまでいく過程で、武士や商人以外の人たちの変容も大きな問題となるでしょうね。

斎藤 「もののはじめ」現象で意味での豊かさをもつていた近世社会をみないとわからないところがあります。たとえば、ハワイ移

井川 「市制施行と横浜の人びと」展で出した「横浜貿易商青年会会誌」や「横浜与論」の創刊号も五味コレクションです。

阿部 長時間御苦労様でした。（横浜開港資料館記念室における）一月六日の座談です。筆記は堀勇良があたりました。

斎藤 今日は事実調べに限定したので、日本人に受容されなかつたものも非常に面白いテーマだと思いますが、今日はとりあげないことにしました。ひとつだけ特別な事象としてゲーテ座がありましたが、一般市民には直接的な関係がない。歌舞伎の伝統がありますから、その意味では、固有の文化のあるところでは受容されないし、日本になかったものが受容されるといえるかと思いま

井川 横浜商人といつた場合にも、冒險投機商といわれるよう、新しい生活社会をつくってきたのが三都商人や武士や公家ではない人たちであつたところが面白いわけです。「もののはじめ」を創始した人と受容した人の階層性についても共通したところがあるのではないかという気もします。

阿部 今回の展示は、この資料館でもつてますので、新事実を実証する資料たとえば新聞の開業広告などは大いに出します。それから、今回の展示は、この資料館でもつてますので、新事実を実証する資料たとえば新聞の開業広告なども企画しています。チラシ類になります珍しいものがあります。

阿部 「五味コレクション」はこれまでの展示でもよく利用していますよ。

阿部 ところで、実際の展示はどうなるになるの。

斎藤 展示としては、やはり史実を吟味することに主眼を置いてありますので、新事実を実証する資料たとえば新聞の開業広告などは大いに出します。それから、今回の展示は、この資料館でもつてますので、新事実を実証する資料たとえば新聞の開業広告なども企画しています。チラシ類になります珍しいものがあります。

阿部 それがいつも苦しいところで、展示を補完する意味で、当館普及誌「たまくす」の第六号で「横浜もののはじめ考」という特集をします。そこに新事実をたくさん盛りこんでありますので、展示とともに御覧いただければと思います。

五味亀太郎

それから、「もののはじめ」の切

じめ」という議論があつても良い

が定着して移民になつてしまつた

んですが、背景には貧しいけれど質の高い労働力があつたわけで、その一端がいわゆる「ハワイ元年者」の移民にあらわれている。一方で、商人のなかに蓄積されてい

日本の場合は、先進的な外国のもが入つてくるという特定の現象であつて、そもそもそれがそんなはじめ」とは質が違いますよね。日本の場合は、先進的な外国のもが入つてくるという特定の現象であつて、そもそもそれがそんなはじめ」とは質が違いますよね。日本の場合は、先進的な外国のもが入つてくるという特定の現象であつて、そもそもそれがそんなはじめ」とは質が違いますよね。

斎藤 横浜「もののはじめ」がなぜ人気があるのかといえば「初めてである」というただそのことによって、名もない庶民が歴史にのこつてしまう面白さなんですよ。武家社会のない商人・職人のまちである横浜を舞台にして、イントリでもエリートでもない庶民が、素養はないが努力と情熱だけをたよりにして素手で立向つて成しとげてしまう一種の成功物語が人気の秘密になつていて。

井川 横浜商人といつた場合にも、冒險投機商といわれるよう、新しい生活社会をつくってきたのが三都商人や武士や公家ではない人たちであつたところが面白いわけです。「もののはじめ」を創始した人と受容した人の階層性についても共通したところがあるのではないかという気もします。

斎藤 それがいつも苦しいところで、展示を補完する意味で、当館普及誌「たまくす」の第六号で「横浜もののはじめ考」という特集をします。そこに新事実をたくさん盛りこんでありますので、展示とともに御覧いただければと思います。

五味亀太郎

アメリカの資料調査

昨年十月末から二週間ほど、アメリカ東海岸の諸都市を資料調査でまわってきました。資料館では英・米・仏などの歴史資料の収集に努めましたが、今年度から資料館の職員による独自の海外調査が実現することになり、その一部からの情報による机上の収集からようやく脱却して、よりきめ細かな資料の発掘・収集・海外関係機関との人的交流の段階に入つたといえるでしょう。

調査の目的

今回の現地調査は、個別資料の調査というよりは資料所在調査が主眼でした。国内では全米原文書目録といった最も基本的な目録さえ容易に揃わないのが現状です。主要機関の目録や所在目録を收集し、情報を集めることが主目的となつたゆえんです。

また個別的には、資料の残存が少ない外国商館関係の資料を探すこと、また、從来から収集に力を入れている英字新聞の欠号分の発掘も課題でした。

あわせて、今年五月から開催される万延元年遣米使節の展示のための資料調査も行いました。

こうした盛り沢山の課題をかかえ、広いアメリカの、そのまた広

い文書館・図書館・博物館のなか

の調査が目的でしたが、ラスロップ女史はじめ関係者の親切な配慮で、他の諸施設も訪問して関係者と会うことができ大きな収穫がありました。

ハーフ商会は中国に拠点がある商会で、横浜関係の資料もふくらむ膨大な資料が残っています。一

時この商会に勤めていたヴァン・リードの関係や、ペリー艦隊の日本遠征中の印刷物「ジャパン・エクスペディション・プレス」なども含まれています。倉庫は離れたところにあるので、帳簿・書簡・印刷物など資料の種類別にサンプルを揃えておいてくれました。現在、数年がかりの計画でマイクロフィルム化が進められており、完成が待たれます。

ハーフアード大学には資料を収蔵している施設が五〇以上あって、それぞれが独立しており、研究者泣かせです。しかし大学文書館に案内されて、この問題も改善されつつあるのがわかりました。つまり、同文書館では、大学内だけではなく全米の主要大学・図書館をカバーしたデータをコンピュータに入っています。ちなみに原文書のデータベースで「日本」を検索してもうと、二三二項目にのぼりました。帰国後間もなく、依頼しておいたプリントアウトを送つてくれました。このなかから個別資料のデータを送つてもうことができるようになりました。

つきの訪問地は葉巻の美しいハーフアード大学でした。ペイカーゴン

書館にあるハーフ・コレクション

を駆けずり廻っていました。応対してくれた人々も、このカミカゼ旅行にはあきれたことでしょう。

訪問先是、ニューヨーク市立書館、ハーフアード大学のベイカー図書館・ピーボディ博物館・クレスコニアン・セイラムのピーボディ博物館・シラキース大学図書館・ワシントンの議会図書館と国立公文書館、ヴァージニア州レキシントンのブルック家などです。

個人的には、今回の訪米は十七年ぶり。貧乏な大学院生であつた昔(当時は一ドル=三六〇円)と、「経済大国」の一員である現在とを比べれば、まさに隔世の感でした。ともあれ調査の全貌をここで報告するのは無理なので、主なところだけ拾つて紹介します。

ニューヨークからボストンへ最初の訪問地はニューヨーク。市立図書館でフレイザーライブ、スチーワード書簡など商館関係者の資料を調査しました。そのほかにも日本関係のマニュスクリプトがあり、できるかぎり目録を集めました。

おわりに

あわただしい旅でしたが、天候にも恵まれ、調査もかなりの成果をあげることができました。今後は、じっくりと資料調査ができる滞在型の出張が必要となつてくるでしょう。そのような活動のなかからこそ貴重な資料の発掘がなされるはずです。

なお今回の調査にあたつて御助

力・御助言をいたいた方々へ謝意を表するとともに、同僚の吉良芳恵氏の多大な協力があつたことを付け加えます。

(伊藤久子)

つぎにボストンから車で約三〇分のセイラムを訪ねました。一八

世紀末から一九世紀前半に海運・貿易で栄えた港町で、文豪ホーリー

ンゆかりの地としても知られています。

フェチコ館長と旧交を温めたのち

館内を見学しました。

同館は膨大な中国貿易資料を所蔵していますが、そのなかに歌麿・豊國の浮世絵もありました。鎖国時代に日本→中国→セイラムと海上を渡った軌跡が、同時代の記録とともにたどれる貴重な資料で、興味をそそられました。

ここにかぎらず、ほかの博物館・美術館でも印象深かったのは、展示室の広さ・ゆとり・飾りつけの工夫でした。説教臭がなく、ゆつくり楽しめる、気持ちのよい空間は日本ではなかなか味わえないものです。こうした資料の展示ばかりではなく、収蔵方法、利用方法などでも参考になる点が多くありました。

ワシントンにて

ワシントンではおもに議会図書館で調査をおこないました。三つ

の建物に分かれた広大な図書館のなかで、原文書部・雑誌・新聞閲覧室、マイクロフォーム閲覧室、中央閲覧室、版画・写真部、アジア部と、日本関係の資料のあるところはひとつおり廻りました。原

文書関係は一部閲覧し、目録を収集。英字新聞も未収集のものをい

横濱人物小志

15

佐土原藩島津家家老 樺山 舎人(久舒)



① 左端が樺山舎人か。

幕末の写真家ベアトは、数多くの貴重な写真を残しているが、その中に文久三年、薩英戦争の和平交渉のため横浜に派遣された薩摩の使節の写真が二枚ある。一枚は、当資料館発行の『F・ベアト幕末日本写真集』に収められており(写真①)、もう一枚はライデン大学写真コレクションにある(朝日新聞社刊『甦る幕末』)。使節とは薩摩日本写真集に記載されている通り(写真②)、もう一枚はライデン大学写真コレクションにある(朝日新聞社刊『甦る幕末』)。使節とは薩摩日本写真集に記載されている通り(写真③)。

樺山 舎人(久舒)は、薩摩藩の二人を「和平の仲介役」としたのである。二人は、交渉が決裂の危機に瀕すると幕府の役人らとともに薩摩藩使節の説得に努め、また賠償金支払いに際しては「国論」もあるうえに、自分たちの「一存」でとりきめたことであるから、表向きは、薩摩のものが支払うのは不都合である」とする薩摩藩の代表にかわって、イギリス側に支払っている。薩英の関係がこれを機に一転し、急接近していく重要な会談の場で、舎人は一定の役割を果たしたのである。

● 佐土原藩家老、樺山舎人

自ら記した「履歴」によると、天保三年一月二十日、佐土原城下に生まれる。家は代々家老職にあり、また嫡男がない場合は藩主島津家から養子を迎えることになつており、島津家とは血縁関係にある家柄であった。父、久業を右衛門(直陳)である。交渉のもと、萩原延壽氏が「朝日新聞」に連載の「遠い崖」昭和五十二年三月分に詳しい。

「遠い崖」によると、「和睦を願つてはいたものの、みずからそれを言いだすことを快しとしなかつた

藩の重野厚之丞(安繹)と岩下左次右衛門(方平)、支藩、佐土原藩(宮崎県)の樺山舎人と能勢二郎右衛門(直陳)である。交渉のもと、萩原延壽氏が「朝日新聞」に連載の「遠い崖」昭和五十二年三月分に詳しい。



②

この時の功績が大として、大総督府などより表彰があつた。明治維新後も、舎人は佐土原藩権大参事に任命される。しかし四年の廢藩置県で佐土原藩が美々津県に吸収されると、舎人は樺大参事の職を解かれることとなる。

本稿を作成するにあたって、樺山舎人(久舒)関係文書の所蔵者である、ご子孫の遊川房子氏(横浜市中区手町)に大変お世話をなつた。厚く御礼申し上げます。なお同文書は、近く当資料館において複製のかたちで公開される予定である。

(中武香奈美)

考えていた藩主の命で、西洋式砲術を佐久間象山に学ぶ。同六年、遊学をおえて帰藩。

舎人が再出府したのは、ペリーが再度の日本遠征をおこない開国をせまつた安政元年のことであつた。藩主は江戸藩邸にあり、関東の情勢を通じていた舎人は、黒船再来航の報に接するや開戦の危機を感じ、事情に疎い他の家臣らを尻目に急ぎ江戸へのぼつた。しかし、すでに和親条約は締結され警固もとかれているところであつた。藩主忠寛は攘夷鎖港論のとびかう不穏な情勢の中で、藩財政窮窮のため軍備が不十分であることを心配し、藩政改革と軍備、特に海防力強化を舎人に命じた。舎人は同年、帰藩するや家老職に任じられ、宗藩、薩摩の協力をえて改革に着手した。洋式兵制が導入され、銃砲練習生を江戸・横浜・鹿児島に派遣し、銃砲弾薬機械などを購入して軍備が整備された。改革は八年を要し、文久二年におわる。

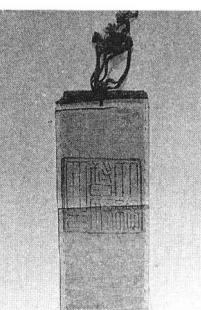
同年三月、藩主とともに出府。江戸在勤を命じられる。この間、一二月には将軍家茂の上洛にも従つていて、この頃の撮影と思われるのが写真②で、「文久二年頃」との裏書きがあるガラス板写真である。

翌三年、帰藩して鹿児島へ出向いている時にくわしたのが薩英戦争であった。これ以降の活躍は文頭に記したとおりである。

● 戊辰戦争の勃発

鳥羽・伏見の戦の報を佐土原で聞いた舎人は、藩主の名代として江戸を開城させた七藩のひとつを引きつれ、船橋・箱根・飯野・磐城平・二本松・会津で七〇余戦を戦つた。この時、舎人の袖に輝いていたのが写真③の「大総督府之印」と刻された袖章である。

舎人はこの頃から、爵位をもらう運動をおこしている。宮内省に提出した幕末維新时期の功劳書や履歴書、樺山家の由緒書等の控えが何通となく残っている。明治四年三月一四日、希いはかなえられぬまま死亡。八〇歳。



③

かかる。三十九歳であった。翌五年六月、東京府十等出仕地券掛を振り出しに、東京・埼玉・長崎・中津・前橋・熊谷の各裁判所の検事を勤める。約一〇年間の役人生活の後、一六年依頼退職。時に五一歳。そしてこれより先に旧藩主島津家の顧問となつていたため、上京。再び旧藩主忠寛に仕えて、四年間をおく。しかし明治二十年、警視庁に勤め、役人生活を再開する。これは、一七年に恩給制度が一般官吏にまで適用されることになり、その勤続年数(一五年)の条件を満たすためであつたと思われる。ぎりぎりでその条件を満たした舎人は二六年、定年をむかえる。同年四月、年額一五〇円の恩給の交付が認められた。そして再び島津家顧問にもどり、翌二〇年、島津家顧問にもどり、役人生活の後、一六年依頼退職。時に五一歳。そしてこれより先に旧藩主島津家の顧問となつていたため、上京。再び旧藩主忠寛に仕えて、四年間をおく。しかし明治二十年、警視庁に勤め、役人生活を再開する。これは、一七年に恩給制度が一般官吏にまで適用されることになり、その勤続年数(一五年)の条件を満たすためであつたと思われる。ぎりぎりでその条件を満たした舎人は二六年、定年をむかえる。同年四月、年額一五〇円の恩給の交付が認められた。そして再び島津家顧問にもどり、翌二〇年、島津家顧問にもどり、役人生活の後、一六年依頼退職。

